

Zeugitai と hoplites ー ソロンの財産等級 (*tele*) と兵役 再考*

Zeugitai and hoplites – a military dimension of the Solon's property classes revisited

岡 田 泰 介

Taisuke Okada

はじめに

古代ギリシアにおいて、戦争が社会に大きな影響を与えていたことは、つとに指摘されている。なかでも、社会経済的な階層と各種の軍事部門（騎兵 hoplites 軽装歩兵 軍船乗組員）とのあいだには密接な関係があり、各社会層は、それが負担する兵役に比例した政治的特権を享受したという説は、古代から現代にいたるまで、広範な支持を集めている。この説を最初に体系化したアリストテレスは、『政治学』において、寡頭政から民主政にいたる国制転換を、騎兵から hoplites へという、国防上重要な軍事部門の変遷と関係づけて説明するモデルを提示した。

ソロンによって前 594/3 年に導入ないし制度化された財産等級¹は、兵役と政治的権利を表裏一体とするこのような原理の制度的表現とみなされてきた。信憑性が疑問視される「ドラコンの法」(Arist.[*Ath. Pol.*]4.2-3) を別にすれば、ソロンの財産等級

* 本稿は、Japan Studies in Classical Antiquity 3 (2017) に掲載予定の英語論文の日本語版である。あえて日本語版を公開する理由は、近年、一線の日本人研究者が研究を欧文で発表することが多くなった結果、初学者に利用しやすい、最新の研究動向をふまえた日本語のギリシア史文献が減ってきているとの声をしばしば耳にすることによる。ただし、本稿は英語版の翻訳ではなく別個に書き下ろされたものであり、また、論旨に変更はないが加筆修正がほどこされている。

¹ 後述するように、ソロンの等級の経済的要件は資産ではなく収穫高であり、厳密には「収入等級」というべきだが、property classes という *tele* の慣例的な英訳にしたがつて、便宜的にこの訳語をあてる。

にかんする主要史料 (Arist. [*Ath. Pol.*]7.1-4; Plut.*Sol.* 18.1-2; Arist.*Pol.*1274a19-21; Poll.*Onom.*8.129-132) はひとつとして兵役に言及していないにもかかわらず、財産等級をアルカイック期・古典期アテナイの軍事制度と関係づける説は、こんにちなお根強い²。しかし、この通説にさまざまな視点から異議をとなえる研究者もまた、近年しだいに増えてきている³。本稿においてわたしたちは、通説を根拠づけている史料をあらためて吟味すると同時に、通説のみならず通説に批判的な近年の諸研究にも再検討をくわえる。分析対象としては、ソロンの四つの財産等級のうち、hoplites との軍制上の関係がひさしく主張されてきた zeugitai をとりあげる。

1. 語源解釈

zeugitai を hoplites と関係づける説の最大の根拠となっているのは、zeugitai の語源を「同じ戦列の兵士」と解釈する、いわゆる「軍事語源説」である⁴。この説によれば、zeugitai は、hoplites の密集隊形 (*phalanx*) の戦列を構成する兵士

² Andrewes 1956. 87; id. 1982. 383; Jeffery 1976.93; Chambers 1990.170; Singor 2000; Guia-Gallego 2010; Crowley 2012. 23-25; de Ste Croix 2004.19-28. Hansen (1981.23-29; 1985.85, 89) は、前5世紀の hoplites が、通常は thetes 以外の上位三等級の兵役年齢者によって構成されていたとする一方、必要に応じて thetes を含むすべての等級の市民が hoplites として動員されることがあったと考えているようである。この問題にかんする近年もっとも有力な論客の一人である van Wees (2001; 2002; 2006) の説は、古典期の hoplites が多数の thetes を含んでいたとする点では hoplites を zeugitai と関係づける通説を修正しているが、兵役を負い政治的権利を享受する上位三等級と、兵役を免除され政治的権利を制限される thetes との社会的分断を強調する点では、ニュアンスの差こそあれ通説を継承しているといえる。同じく有力な論客である Pritchard (2010.23-27; 1994; 1998) もまた、財産等級と兵役との関係を否定する一方、thetes とアテナイ海軍、さらに完全民主政 (彼の表現を借りれば *thetic democracy*) との関連を主張する点で、通説の枠を完全には抜け出ていないように思われる。

³ Kahrstedt 1934. 252-254; MacDowell 1978. 160; Bugh 1988. 32-34; Spence 1993. 180-182; Stanley 1999. 206-208; Rosivach 2002a; Gabrielsen 2002b. Hansen は (1991.44-46) では、かならずしも明確にはないが、財産等級と兵役との関係を否定しているように思われる。

⁴ Andrewes 1956.87; Jeffery 1976.93 et 107 n.6; Whitehead 1981; Chambers 1990. 170; Rhodes 1993. 138; id. 2015.129; van Wees 2001. 61; de Ste. Croix 2004. 49-50; Hornblower 2008. 182. 「軍事語源説」の学説史については、Rosivach 2002a. 36-37.

を意味したとされる。ところで、こうした解釈を根拠づける唯一の zeugitai の用例 (Plut. *Pel.*23.4) は、スパルタ軍にかかわる記事である。また、トゥキュディデス (5.68.3) は、スパルタの hoplites 小隊 (*enomotia*) の最前列を *zygon* とよんでいる。これらの用例をもとに、Rosivach (2002a.37-38; 2012.147) は、zeugitai とその関連語である *zygon* の、hoplites の *phalanx* かかわる用法を、スパルタ軍独自のものと推測する。また、ヘレニズム期には、*zygon*, *zygos* は *phalanx* の縦列に対する横列を意味するテクニカルタームとなるが、Plut. *Pel.*23.4 においても、zeugitai は縦列の兵士 (*epistatai*) に対する横列の兵士を指している。この種の用例は、トゥキュディデスをはじめとする古典期の史料にはみられない。そこで、van Wees (2006.353-354, 354 n.17) は、Plut. *Pel.*23.4 における zeugitai の用法をヘレニズム期のものとする。いずれにせよ、以上の数少ない用例は、zeugitai や *zygon* が、アルカイック期・古典期のアテナイにおいて hoplites やその戦列の意味に使われていた証拠にはならない。

zeugitai には、もう一つ別の語源解釈がある。それは、zeugitai を「一対のウシを持つ者」という意味にとる解釈である⁵。このいわゆる「農業語源説」の唯一の根拠となっているポルックスの記事 (*Onom.*8.132) は、ソロンの財産等級に言及した数行あとで、「一対のウシを持つ人々 (*zeugotrophountes*)」が *zeugesion* という税を支払っていたと述べている。Van Wees (2006.352-353) は、ポルックス (またその底本) が zeugitai と *zeugotrophountes* を同一視しているとの解釈にもとづいて、zeugitai を一対のウシを所有する経済力のある農民ととらえる。Guia-Gallego (2010.261, 265-267) は、さらに、「農業語源説」を hoplites の兵役と結びつけ、zeugitai は兵役を担うに十分な土地を持つ中小農民であったとする。この主張を支えるのは、一対のウシによって効率的に耕作できる最小の土地はおおよそ 5 ヘクタールであり、それは hoplites の兵役を担うのに必要な土地 (3.6~5.4 ヘクタール) とほぼ一致するという説である⁶。

⁵ Hansen 1991.44; Stanley 1999.207-208.

⁶ Burford-Cooper 1977/78.169; Burford 1993.67; Hodkinson 1988.39; van Wees 2006.355-358. ただし、Gabrielsen (2002b.214) は、考古学的に確認できる「標準」規模の所有地をただちに 'hoplite farm' と同一視することには懐疑的である。

しかしながら、Whitehead (1981.284-285) と Rosivach (2002a.40-41) は、van Wees の解釈を批判し、ポルックスの記事のなかで *zeugotrophountes* はソロンの財産等級とは別の、各種の税にかんする文脈に属するのであり、*zeugitai* と同一視することはできないとする。Whitehead は、*zeugotrophountes* を、軛でつながれた役畜の調教師（あるいはその供給者、利用者）にとらえる。Whitehead と Rosivach の解釈にしたがえば、ポルックスの記事は *zeugitai* の「農業語源説」の根拠としての意味を失うことになる。

以上のように諸説紛々としている *zeugitai* の語源解釈から唯一確実なのは、語源解釈は *zeugitai* を *hoplites* と関係づける十分な根拠とはなりえないということである。

II. Thuc.6.43; 8.24.2

zeugitai の語源をめぐる確たる結論の出ない解釈を除くと、*zeugitai* と *hoplites* との軍制上の関係の証拠となりそうなのは、本節のタイトルに掲げたトゥキュディデスの二つの箇所のみとなる。とくに重要なのは、前 415 年に出征したシケリア遠征軍の構成を叙述する箇所 (6.43) である。ここでトゥキュディデスは、100 隻の船に乗りこんだアテナイ人 *hoplites* のうちわけを、徴兵名簿から (*ek katalogou*) 召集された 1,500 人と、志願兵の *thetes* から成る搭乗戦闘員 (*epibatai*) 700 人と伝えている⁷。もう一つの箇所 (8.24.2) は、前 412 年にレスボスへ向かったアテナイ艦隊に、*hoplites ek katalogou* が搭乗戦闘員として強制的に乗船させられていたと伝える。

多くの研究者は、これら二つの記事をつぎのように解釈している。Thuc.6.43 は、当時のアテナイの *hoplites* が、*thetes* の搭乗戦闘員と、徴兵名簿から召集される *hoplites ek katalogou* という二つの異なるカテゴリから成っていたことを示す。後者 (*hoplites ek katalogou*) が、ふつうは搭乗戦闘員にならなかつ

⁷ これは、トゥキュディデスにおける *thetes* の唯一の用例である。Rosivach (2002b.41 n.21) は、この *thetes* を貧しい雇用労働者という一般的な意味にとるが、わたしたちは、de Ste. Croix (2004.20-21) とともに、ソロンの財産等級とみなす。

たことを示唆する Thuc.8.24.2 は、それをうらづける。したがって、搭乗戦闘員以外の hoplites は、zeugitai をはじめとする thetes 以外の上位三等級の市民から成っていた⁸。それが正しいければ、トゥキュディデスの二つの記事は、hoplites *ek katalogou* が zeugitai にほぼ相当することを示す唯一の古典期の史料となる⁹。Van Wees (2001.46, 59-61; 2002.67-69 et 67 n.23; 2006.371-376) は、こうした理解をもとに、thetes は hoplites の兵役を免除され、志願兵としてのみ従軍したと主張している。

しかしながら、この解釈の前提となる、搭乗戦闘員が通常 thetes のみで構成されていたという理解は、搭乗戦闘員の社会経済的地位が比較的高かったことを示唆する少なからぬ史料と整合しない¹⁰。thetes のみから成っていたらしい前 415 年の搭乗戦闘員の構成を一般化することができないとすれば、アテナイの hoplites を、thetes の搭乗戦闘員と上位三等級の hoplites *ek katalogou* とに二分する根拠はなくなる¹¹。

搭乗戦闘員の社会経済的地位の高さをうかがわせる史料は、少なくない。サラミス海戦の前夜、テミストクレスは、搭乗戦闘員たちを呼び集めて訓示をおこなった (Hdt.8.83)。デモステネスのアイトリア遠征 (前 426 年) のさいに戦死した 120 人の搭乗戦闘員を、トゥキュディデス (3.98.4; cf. 95.2) は「この戦争中にアテナイ人のポリスから喪われたまさに最良の人々 (*beltistoi*)」と称えている¹²。搭乗戦闘員は、シケリア遠征軍の出陣式にあたって、トリエラルコスとともに灌奠の儀式を執りおこなった (Thuc.6.32.1) ¹³。名門出身のア

⁸ Busolt-Swoboda 1920-1926.575 n.1, 1206; Körte 1932.1030; Laing 1960.137 n.23; Gomme 1970.310 (Dover); id.1981.56 (Andrewes); de Ste. Croix 2004.21; van Wees 2001.59; id. 2004.210, 308 n.40; id. 2006.371; Hornblower 2008.815-816.

⁹ de Ste. Croix 2004.21; Guia-Gallego 2010.258-259.

¹⁰ Jordan 1975.195-203; Pritchard 2010.24 n.139.

¹¹ Gabrielsen 2002a.87, 92; id. 2002b.205-206.

¹² Gabrielsen 2002b.211. Gomme (1956.407-408) は、搭乗戦闘員を thetes とする説に固執しているが、Andrewes (Gomme 1981.56) はより慎重な姿勢を示す。Hornblower (1991.514) は訝しがり、Morrison (2000.110) は、身体的に優れたエリート部隊の意味にとる。

¹³ Jordan 1975.197; Morrison 2000.110. Gomme (1970.296) は、thetes がそのような重要な役割をはたすことはありえないとして、彼らを 'representatives of the troop on board' とみなす。

ンドキデスは、前 399 年の弁論のなかで、騎兵としても hoplite としてもトリエラルコスとしても搭乗戦闘員としても、従軍した経験がないと批判されている (Lys.6.46)¹⁴。このような「エリート」としての搭乗戦闘員の姿は、碑文と図像資料によってもうらづけられる。三段櫓船 8 隻の乗組員の名簿を記録していたと思われる前 5 世紀末の碑文 (IG I³ 1032) のなかで、搭乗戦闘員はつねにトリエラルコスにつぐ位置にあり、彼らの艦上での地位をうかがわせる。また、彼らはそれぞれ、おそらく、すくなくとも一人の奴隷をとまっており、有力な家系の一員と思われる者も含まれている¹⁵。前 400 年ごろに死去したデメトリオスの子デモクレイデスの墓碑には、衝角のある軍船の舳先に座す人物の浮き彫りがほどこされている。彼の背後に置かれたコリントス式の兜と盾は、彼が hoplite、つまり搭乗戦闘員であったことを示唆している。この美しい墓碑は、被葬者の家族の富を思わせる¹⁶。

傍証になるが、アテナイ以外の国々の搭乗戦闘員もまた、総じて裕福で地位の高い人々であつたらしい。前 494 年にラデ沖で戦ったキオス船の搭乗戦闘員は、「えり抜きの人々 (*andres logades*)」であつた (Hdt.6.15)。トゥキュディデス (1.55.1) は、シュボタの海戦 (前 433 年) でコリントス軍の捕虜となつたケルキュラ市民のほとんどが「第一人者たち (*prōtoi*)」であつたと述べており、彼らは漕手ではなく搭乗戦闘員であつたろう。ペロポネソス戦争末期に活躍したシラクサのストラテゴス、ヘルモクラテスは、決断にあたって、麾下のトリエラルコスと搭乗戦闘員に相談するのをつねとしたという (Xen. *Hell.*1.1.28)¹⁷。アリストテレス (*Pol.*1327b6-10) は、船を支配するのは「陸兵の一部たる自由な搭乗戦闘員 (*epibatikon*)」であると述べている。

以上の証拠から、前 5 世紀のアテナイにおいて、*thetes* 以外の市民が搭乗戦

¹⁴ 修辭的な表現ではあるが、Andrewes (Gomme 1981.56) は、すくなくとも当時、アンドキデスにはこれらの兵役をはたす可能性があると思念されていたと考える。

¹⁵ ヒッポダマス (IG I³ 1032 l.284) は、前 459 年にストラテゴスをつとめた同名人の孫と考えられている (Laing 1965.77-78; Osborne-Byrne 1994.237)。Laing (1965.137 et n.23) は、このケースを例外とみるが、根拠はなく、わたしたちは同意しない (岡田 2015.17-18)。

¹⁶ Jordan 1975.198; Strauss 2000.262-264; 岡田 2015.20.

¹⁷ Krentz 1989.103.

闘員として従軍したことには、ほぼ疑問の余地がない。したがって、搭乗戦闘員全員が *thetes* から成っていた前 415 年のケースは例外である可能性が高く、トゥキュディデスが全編を通してこの箇所でのみ *thetes* に言及していることも、それをうかがわせる。搭乗戦闘員が通常は *thetes* にかぎられなかったとすれば、トゥキュディデス (6.43) が区分しているのは、*thetes* の搭乗戦闘員と上位三等級の *hoplites ek katalogou* ではなく、志願兵の搭乗戦闘員と徴兵の *hoplites ek katalogou* と考えるべきであろう¹⁸。搭乗戦闘員がふつう志願兵であったことは、貢租徴収のための艦隊派遣にかかわるらしい碑文 (*IG.I³ 60*) によってうらづけられる。Meritt (1953.298-299) の復元にしたがうなら、ここでは、各艦に志願兵 (*ethelontes*) の搭乗戦闘員が 5 人ずつ乗り組むものとされている (II.10, 15-16)。財産等級への言及はみられない¹⁹。搭乗戦闘員が等級をとわず志願者から募集されていたとすれば、Thuc.8.24.2 の強調点は、*thetes* 以外の市民が搭乗戦闘員として動員されたことではなく、ふつうは志願兵の搭乗戦闘員がこのときは徴兵されたことにあると考えるべきであろう。

以上を要するに、Thuc.6.43; 8.24.2 は、従来の解釈とは異なり、*hoplites ek katalogou* は *zeugitai* を中心とする上位三等級の市民のみからなっていた、あるいは *thetes* は *hoplites* の兵役に就かず志願者のみが従軍した、という説の根拠とはなりえない。この結論を検証するため、次節では、*thetes* は *hoplites* の徴兵名簿 (*katalogos*) に登録されたか否かという問題を検討する。

III. *hoplites* の *katalogos*

古典期の史料にみられる *katalogos* については、*hoplites* の兵役を負う市民全員を登録した恒久的な兵籍名簿とみなす説がかつては一般的であったが²⁰、現在では、必要に応じてそのつど作成される暫定的な徴兵名簿という理解が広く支持されている。すなわち、前 5 世紀半ばから前 4 世紀半ばまでは、ストラ

¹⁸ Pritchard 2010.24-25.

¹⁹ Jordan 1975. 201-203; Gabrielsen 2002a. 92.

²⁰ Jones 1957. 163; Gomme 1970. 264 (Dover).

テゴスが出征のたびに各部族から決まった人数の兵士を選び、選ばれた兵士の名簿をアゴラに掲示した。これが *katalogos* で、こうして選ばれた兵士が *hoplites ek katalogou* である。この名簿は、かつて想定されたような恒久的な兵籍名簿ではなく区民名簿 (*lēxiarchika grammateia*) を原簿として、そのつど作成された。このような選抜徴兵制度は、遅くとも前 4 世紀半ばまでに、同一の年齢集団を一律に動員する徴兵制度に置き換えられた²¹。

問題は、*thetes* がこの *katalogos* に登録されたか否かである。現在にいたるまで、ほとんどの研究者は、*thetes* は *katalogos* に登録されなかった、したがって *thetes* は *hoplites* の兵役を免除されていたと考えている²²。たとえば、van Wees は、上述のように、*thetes* 以外の上位三等級の市民は兵役を負い、随時 *katalogos* に登録されて従軍したが、*thetes* には *hoplites* の兵役がなかったのも *katalogos* には登録されず、志願した場合のみ従軍したと主張する。わたしたちは、すでに、Thuc.6.43; 8.24.2 が、このような主張の根拠とはなりえないことを示した。そこで、以下本節では、その他の史料を吟味する。

まずとりあげるべき史料は、Arist.*Pol.*1303a1-10 と Arist.[*Ath.Pol.*]26.1 の二つである。『政治学』のなかでアリストテレスは、「アテナイでは、[人々が(筆者補い)] 陸上で不運にみまわれたとき、ラケダイモン人との戦争のあいだ [人々は] 徴兵名簿から (*ek katalogou*) 従軍していたために、名のある人々 (*gnōrimoi*) は減った」と述べる。また、『アテナイ人の国制』は、おそらくエフィアルテス改革後の時期について、「なぜなら、その当時、軍隊は徴兵名簿から (*ek katalogou*) 成りたっており、戦争の経験はないが父祖の名声ゆえにおもんじられた人々が將軍に任じられていたので、出征するたびに 2000 人や 3000 人ずつが戦死するということになり [その結果(筆者補い)] 民衆 (*dēmos*) からも富裕者 (*euporoi*) からも優れた人々 (*epieikeis*) が死んだからである」と伝えている。

研究者たちは、これらの史料を根拠に、前 5 世紀半ばから後半にかけては、

²¹ Clerc 1893.52-53; Hansen 1981.24-29; Hamel 1998.24-25 et n.67; Christ 2001; Crowley 2012.28.

²² Clerc 1893.52; Ridley 1979.519; Hansen 1981.26, 28-29; id. 1985.88; Hanson 1996.292; de Ste. Croix 2004.21; Guia-Gallego 2010.258-260.

中・上層市民のみが *katalogos* に登録されて動員される一方、下層市民すなわち *thetes* は *katalogos* に登録されず、兵役にも就かなかったと考える²³。しかしながら、まず注意せねばならないのは、『アテナイ人の国制』の記事は、富裕者 (euporoi) だけでなく民衆 (*dēmos*) もまた *katalogos* に登録されて従軍し、双方の優れた人々 (epieikeis) が死んだとしている点である。つまり、この箇所 *epieikeis* は上層市民ではなく、階層にかかわらず優れた市民を意味していると考えらるべきであろう²⁴。つぎに、アリストテレスは『政治学』の記事のなかで「名のある人々 (*gnōrimoi*)」が大きな被害を被ったとは述べているが、一般市民に比して「名のある人々」の被害が大きかったとはいっていない。彼がいわんとするのは、市民全体が大きな被害を被ったので「名のある人々」にさえ被害が及んだということではないか。アテナイ帝国の時代に、それまで風雪に耐えて生きのびてきた名門の一族や家が滅んだとするイソクラテスの記事 (8.88) は、この解釈を傍証するように思われる²⁵。さらにいえば、前 5 世紀の戦争の被害が上層市民のみに集中することは現実にはありえないので、『政治学』の記事にはアリストテレスのイデオロギー的なバイアスがかかっている可能性が考えられる²⁶。

thetes には *hoplites* の兵役がなかったという主張の根拠として、つぎによく引かれる史料は、ハルポクラティオンの引用 (Harp. s.v. *thētes*, *thētikon*) を通して現存している、アリストファネス『ダイタレイス』(F248 Kassel-Austin = F232 Kock) とアンティフォン『フィリノス弾劾』(F61 Thalheim) の二つの断片である。ハルポクラティオンは「アリストファネスもまた『ダイタレイス』のなかで〈彼ら [*thetes* (筆者補い)] は従軍しなかった (*ouk estrateuonto*)〉

²³ Andrewes 1981.2-3; Hansen 1981.28-29; id. 1985 88-89; Hamel 1998.25 n.70; Christ 2001.399; van Wees 2001.46-47 et 65 n.10. Hansen (1981.28; 1985.88) と Rhodes (1993.327) は、この箇所ではアリストテレスは、前 5 世紀の選抜徴兵制度を同時代の年齢別一律徴兵制度と対比させていると考える。

²⁴ Chambers 1990. 262; Rhodes 1993. 328; Gabrielsen 2002b. 206-207; Hamel 1998. 25 n.70.

²⁵ Chambers (1990.263) は、Arist.[*Ath. Pol.*]26.1 の情報源はイソクラテスの門弟アンドロティオンではないかと考えている。

²⁶ Gabrielsen 2002b.206.

といっている」と伝える。アンティフォンの言葉は「すべての thetes を hoplites とすべし」と直接に引用されている²⁷。しかしながら、まず、アリストファネスのいわんとするところが、thetes は hoplites として従軍しなかったということなのかどうかは、現存する間接引用からははっきりしない。Van Wees (2001.60-61; 2002.67-68 n.23) は、ハルポクラティオンは thetes が兵役を負わなかったことへの喜劇の揶揄を誤解して伝えていると考える。また、Rosivach (2002a.33 n.5) が指摘するように、アリストファネスの言葉は単なる冗談にすぎない可能性もある。一方、アンティフォンの言葉は、thetes の全員が hoplites として従軍したわけではなかったという部分否定として、すくなくとも一部の thetes は hoplites として従軍していたと読むこともできる²⁸。さらに、これらの発言はいずれも文脈を完全に欠いた断片であり、それ自体としての史料価値は高くないことにも留意せねばならない²⁹。

間接的な証拠として、前 430/29 年の疫病の被害に言及したトゥキュディデスの記事 (3.87.3) がある。そのなかで彼は、「部隊 (*taxeis*) から、すくなくとも 4400 人の hoplites が死亡し、また、すくなくとも 300 人の騎兵 (*hippeis*) も死んだ。その他の大衆 (*ho allos ochlos*) の [死者の (筆者補い)] 数は見いだせなかった」と述べている。多くの研究者は、トゥキュディデスは、騎兵と hoplites (すなわち上位の財産等級) については *katalogos* によって正確な犠牲者数を知りえたが、*katalogos* に登録されていなかった「その他の大衆」つまり thetes の死者については具体的な数がつかめなかったと考える³⁰。しかし、トゥキュディデスはこの箇所、ソロンの財産等級にはいっさいふれていない。彼はたんに、騎兵と hoplites という二つの軍事部門の被害に言及しているだけである。「その他の大衆」は、騎兵と hoplites という現役兵以外の雑多な被害

²⁷ Ridley 1979.519; Hansen 1991. 45-46; de Ste. Croix 2004.13; Guia-Gallego 2010. 258.

²⁸ van Wees 2001.71 n.72. Hanson (1996.306) は、この史料を、thetes を含む全市民に公職就任資格を開放すべし、という意味に解釈している。

²⁹ Rosivach (2002a.34 n.13) は、この箇所の thetes を財産等級ではなく 'rural underclass' ととらえるが、Pritchard (2010.24) はそのような解釈に懐疑的である。

³⁰ Hansen 1991.116; Hornblower 1991.494-495; Brûlé 1999.64-65; de Ste. Croix 2004.19.

者を指しているにすぎないとも考えられる³¹。

thetes は兵役に就かず、志願した場合のみ hoplites として従軍したと考える van Wees は、その根拠として Arist. *Pol.*1297a29-39 を引く。『政治学』のこの箇所ではアリストテレスは、貧者を軍事への参加から排除することなく、なお兵役と政治的権利は有産者に限定することを主張し、有産者には兵役が義務づけられる一方、貧者は兵役を免じられつつ武装の権利はみとめられている寡頭体制の例を挙げている。しかし、Rosivach (2002a.35-36) がいみじくも指摘するように、このアリストテレスの議論は理論的・一般的な性格のもので、アルカイック期・古典期のアテナイに適用するには、それを支持する別の史料が必要である。そのような史料は管見のかぎりみあたらない。

上述のように、*katalogos* は、動員のたびに、区民名簿 (*lēxiarchika grammateia*) をもとに作成されたと考えられている³²。一部の研究者は、thetes はそもそも区民名簿に登録されていなかったと考える。この説の数少ない根拠の一つは、区民名簿を *lēxis* または *klēros* すなわち世襲財産を所有する人々の名簿とする語源解釈である (Poll. *Onom.*8.104; Harp. s.v. *lēxiarchikon grammateion*)。この解釈にしたがえば、thetes は無産者であるため、区民名簿には登録されなかったことになる³³。しかし、*lēxiarchikos* という形容詞は *lēxiarchos* という名詞の派生語であり、*lēxiarchikon grammateion* は、語源的には「*lēxiarchos* が管理する名簿」と解釈するほうが自然である。ポルックス (*Onom.*8.104) によれば定員 6 人で民会の出欠管理にあたったとされる *lēxiarchos* は、おそらくクレイステネス改革以前にさかのぼる役人であり、市民の名簿管理も彼らの任務であったと考えられている³⁴。さらにいえば、後述するように、thetes は無産者とはかぎらなかった。

³¹ Gomme (1956.388) は、「その他の大衆」を、メトイコイと外国人 女性と子ども 奴隷と解釈する。

³² 区民名簿が徴兵原簿として利用された可能性については、Frost 1984.284; Christ 2001.401; Bakewell 2007.90-91 et 90 n.10.

³³ Busolt-Swoboda 1920-1926.966 n.1; Habicht 1961.5-6 et 5 n.5, 6 n.3; Vidal-Naquet 1968.164-165.

³⁴ Jameson 1963.399-400; van Effenterre 1976.11-14; Frost 1984.284.

信憑性に疑問の残る「テミストクレスの決議 (*SEG* 22.274 = *ML*.23)」を別にすれば、碑文における区民名簿の初出は、Jameson (1980.44) が前 440 年代または前 430 年代初頭に年代づける *IG* I³ 138 である。これは、騎兵と *hoplites*、それに市民と外国人から成る弓兵からも、一定額の金銭を徴収することをさだめた決議である。区民名簿に登録されている人々からの徴収には区長 (*dēmarchoi*) があたる一方、弓兵からは弓兵隊長 (*toxarchoi*) が徴収するものとされている。一部の研究者は、この箇所を、*thetes* が区民名簿に登録されていなかったという主張の根拠としている。すなわち、区民名簿に登録されている騎兵と *hoplites* からは区長が徴収したが、市民の弓兵つまり *thetes* は未登録であったため、弓兵隊長が徴収にあたったとされる³⁵。

しかしながら、弓兵隊長が弓兵からの徴収を担当したことは、かならずしも *thetes* が区民名簿に登録されていなかったことを意味するわけではない。Jameson (1963.400; 2014.50) と Meritt (1967.124) は、弓兵隊長が徴収にあたった弓兵は外国人のみであって、区民名簿に登録されていた市民身分の弓兵からは、騎兵および *hoplites* とともに区長が徴収したと考えている。また、区民名簿はクレイステネス改革 (前 508/7 年) のさいに作成され、市民は財産等級をとわず全員が登録されたはずと主張する研究者もいる³⁶。さらにいえば、財産等級への言及は碑文のどこにもなく、弓兵がもっぱら *thetes* から募集されたという証拠もないのである。

こうして、以上吟味した史料のいずれも、*thetes* は *katalogos* に登録されなかった、すなわち、彼らは上位の財産等級に属する市民と違って *hoplites* の兵役を負わなかったという仮説をうらづけるには、十分でないことがあきらかになった。反証がない以上、*thetes* もまた、ほかの等級の市民と同じく、原則として *hoplites* の兵役に就いたと考えるべきである。実際、前 4 世紀には、*thetes* が *katalogos* に登録されていたことを示す幾つかの史料が存在する。デモステ

³⁵ Habicht 1961.5-6; Vidal-Naquet 1968.164-165; Jordan 1975.206-208; van Effenterre 1976.8-9 et 9 n.30; Johansson 2001.84.

³⁶ Meritt 1967.124; van Effenterre 1976.11; Jameson 2014.50 n.25; Whitehead 1986.35-36 n.130; Sickinger 1999.55.

ネスの名で伝わる前 354/3 年の弁論 ([Dem.] 13.4) は、*katalogos* に登録される年齢を超えた人々 (*tous hyper ton katalogon*) に対するなんらかの手当の支給について論じている。Hansen (1981.27; 1985.89) と Gabrielsen (2002a.94; 2002b.207) は、*thetes* もまた当時は *katalogos* に登録されていたと考えないかぎり、デモステネスの議論は意味をなさないとする。同じくデモステネスの名を冠した前 362/1 年の別の弁論 ([Dem.] 50.6-7, 16) は、艦隊の編成にさいして、乗組員を *katalogos* にもとづいて動員することに言及している。これは海軍にかんする史料だが、アテナイ海軍は、すでに前 5 世紀から、ときに *katalogos* を利用して乗組員を動員していたらしい (Thuc.7.16.1. cf. 7.20.2) ³⁷。

thetes が、*zeugitai* と同じく *hoplites* の兵役を負い、随時 *katalogos* に登録されて従軍していたとすれば、*zeugitai* を軍制上 *hoplites* と関係づける根拠はなくなる。そこで次節以下では、*zeugitai* の資格要件に目を向ける。『アテナイ人の国制』をはじめとする関係史料が伝える *zeugitai* の資格要件が正しければ、それはわたしたちの主張をうらづけるであろう。

IV. *zeugitai* の資格要件

史料は、*zeugitai* の資格要件を、年 200～300 単位の「乾燥物と液体」の収穫物と伝える。それをもとに、これまで多くの研究者たちが、この収穫高に相当する土地の面積を算出しようと試みてきた。たとえば、Hignett (1953.100-101) は、*zeugitai* の所有地を 43 エーカー (17.4 ヘクタール) 以下とする。Starr (1977.154 et 244 n.23) は、収穫物をすべて穀物と仮定した場合の *zeugitai* の所有地を、休閑地を含めて 12 ヘクタールと推定する。よりよい資料を利用した Foxhall (1997.129-130) の試算によれば、200 単位のコムギを生産する農地の規模はすくなくとも 8～13 ヘクタール、オオムギなら 7～11 ヘクタールとされる。van Wees (2001.47-51; 2006.361) は、きわめて洗練された計算方法を用いて、200 単位を生産する農地を 8.7～13 ヘクタールと見積もる。これを平均して 10.85 ヘクタールとすると、その規模の土地は、古典期ア

³⁷ Gabrielsen 2002a.94; id. 2002b.207; van Wees 2002.67-68 n.23.

テナイでは 6000 ドラクマ=1 タラントに値する。ばらつきはあれ、以上のような推定値にもとづいて、ほとんどの研究者たちは、つぎのような見解を共有している。すなわち、推定される zeugitai の所有地の規模は、家族を養い hoplites の兵役を担うにたる標準的な農地（3.6～5.5 ヘクタール）の二～三倍にあたり、ゆえに、zeugitai はたんなる自給農民ではなく、むしろ富農とみなすべきである³⁸。

この見解をふまえて、研究者たちは、zeugitai の資格要件（200～300 単位）は、hoplites が zeugitai であったとすれば、高すぎると考えている。なぜなら、まず、200～300 単位の収入は、多額の経費のかかる馬を保有する富裕層である hippeis の収入 300～500 単位に比して不釣り合いに高い³⁹。というのも、軍馬の値は、前 4 世紀には平均 500 ドラクマであり、それはおよそ 15 ヶ月分の賃金に相当した。くわえて、馬糧にも費用がかさんだ⁴⁰。それに対して hoplites の武具は、古典期には、もっとも安価なものなれいぜい 25～30 ドラクマ、およそ 1 ヶ月分の賃金相当であった⁴¹。したがって、hoplites として兵役に就くことが zeugitai の要件であるならば、彼らの資格要件は hippeis のそれよりもずっと低かったはずである。

つぎに、hoplites の全員または大半が zeugitai であったと仮定した場合⁴²、65,000～96,000 ヘクタールと見積もられているアッティカの可耕地は、hoplites 全員をうけいれるに十分ではない。なぜなら、13,000 人と伝えられる

³⁸ Foxhall 1997.131; Raaflaub 1999.150-151 n.49; van Wees 2001.51; id. 2006.361; Rosivach 2002b.38. わたしたちは、以上のような試算が多くの抜きがたい不確定要因を前提としており、したがって多分に推測的・暫定的な根拠にもとづいていることに留意しておかねばならない。たとえば、収穫高の単位である「乾燥物と液体」の意味ですら、さだかではないのである。この問題については、Chrimes 1932.2-4; Thomson 1953.840-850; Jeffery 1976.107.n.6; Andrewes 1982.383; Rhodes 1993.141-142; id. 2015.129; Stanley 1999.208; van Wees 2001.47; de Ste.Croix 2004.32-40. Skydsgaard (1998.50-54) は信頼にたる試算の実現可能性について悲観的である。

³⁹ Bugh 1988.27; Rosivach 2002b.36; de Ste. Croix 2004.47.

⁴⁰ Spence 1993.183, 272-286.

⁴¹ van Wees 2002.63-64.

⁴² Hansen 1981.22.

前 431 年当時の現役 hoplites 一人あたりの所有地を、van Wees にしたがって 8.7～13 ヘクタールと仮定すると、その合計は、一家で二人が従軍する場合などを除外した単純計算で、113,100～169,000 ヘクタールに達する。ペルシア戦争時にアテナイが動員した 8,000～9,000 人の所有地は、すくなくとも 69,600～104,000 ヘクタールとなる⁴³。De Ste. Croix (2004.47-48) が 3,000～5,000 人と推定するソロン時代の hoplites の所有地ですら、26,100～39,000 ヘクタールにのぼる。

さらに、zeugitai の所有地にくわえて pentakosiomedimnoi と hippeis もまたかなりの面積の土地を占めていたとすると、必然的に、thetes のほとんどは、まったく土地を持たないか、自給不能なほど小規模な土地しか所有していなかったと考えねばならない。実際に、研究者のなかには、語源解釈を根拠として、あるいはアプリオリに、thetes を自由人ではあるが無産の雇用労働者とみなす者もいる⁴⁴。

しかしながら、史料は、thetes の資格要件を 200 単位以下の収穫高と伝えているのであって、かならずしも無産者としているわけではない。事実、古典期には、無産者とは異なる貧者 (*penētes*) という階層が存在したことを示す史料がある。アリストファネス『福の神』のなかで、プルーツスは「一方で、おまえのいう乞食 (*ptōchos*) の生活は、なにも持たずに生きることだ。他方で、貧乏人 (*penēs*) の [生活は (筆者補い)] 儉約しつつ仕事に精を出して生き、自分にはなにも余らないが、そうかといって事欠くこともないことだ (552-554)」と述べている。アリストテレス (*Pol.*1252b12) もまた、ヘシオドスを引用しつつ「牛は貧しい人々 (*penētes*) にとっては奴隷の代わりだから」と述べており、奴隷を持たない貧者 (*penētes*) もウシは所有していたことをうかがわせる。

一部の研究者は、thetes は (あるいは、すくなくとも彼らの一部は) 40 プレトロン (3.6 ヘクタール) 以下、おそらく平均 20 プレトロン (1.8 ヘクタール) ほどの土地を耕す小農民であったと考えている。この規模の農地は、休閒をは

⁴³ Starr 1977. 154-155, 244 nn. 24, 25; van Wees 2001. 51-54; de Ste. Croix 2004. 46-48; Raaflaub 1999. 138, 150-151 n.49; id. 2006. 405; Pritchard 2010. 23.

⁴⁴ Thomson 1953. 848; Jeffery 1976. 93; Pritchard 1994. 116-117; Hanson 1996. 290-291. cf. Jameson 1992. 145.

さまない集約的な耕作をおこなえば、thetes とその家族を扶養するに十分であつたとされる⁴⁵。Foxhall (1997.129, 131-132) は、ペロポネソス半島南東部メタナ地方で 1970 年代におこなわれていた自給的なコムギ栽培にかんする研究にもとづいて、この主張を支持している。メタナでの平均的土地所有規模は、コムギ以外の作物の栽培地 休閑地 森林を含めて 3.5 ヘクタールであつた。彼は、thetes のなかには‘odd hoplites’となりうる比較的裕福な農民がいたと考えている。Van Wees (2001.51) もまた、thetes の所有地を、標準的な ‘family or hoplite farm’ に匹敵する平均 4.3 ヘクタールと推定する。付言すれば、土地所有が事実上共同体の構成員資格となっていたアルカイック期の社会において、まったく土地を持たない市民がそれほど多数存在したとは考えにくい。また、かりにペルシア戦争以降の社会経済的発展の結果として土地を持たない市民が増加したとしても、彼らはかならずしも無産者ではなく、土地以外に収入源を持つ者が少なからずいたにちがいない⁴⁶。

要するに、史料が伝える zeugitai の資格要件の信憑性をみとめるならば、hoplites の全員ないし大多数が zeugitai から成っていたとは考えにくいのである。zeugitai の所有地を標準的な ‘hoplite farm’ とされる 50 プレトロン (4.5 ヘクタール) と仮定したとしても、前 431 年の現役 hoplites の 13,000 人だけで、アッティカの可耕地面積の最大見積もり 96,000 ヘクタールの 60% に相当する 58,500 ヘクタールを占有することになる⁴⁷。次節では、この問題に対する研究者たちの説明を批判的に検討することを通して、わたしたち自身の見解を示す。

⁴⁵ Burford-Cooper 1977/78. 170-171; Hodkinson 1988. 39.

⁴⁶ Raaflaub 2006. 414-415. 後述するように、前 5 世紀末には、土地を持たない市民がおよそ 5,000 人いたとされるが、彼らのなかには、騎兵や hoplites、あるいは弓兵となりうる者が含まれていたらしい。Lys. 34. 4; Dion Hal. *Arg. ad Lysiam* 34.

⁴⁷ Jameson 1992.145.

V. 社会経済的階層としての zeugitai

zeugitai の資格要件にかんするジレンマを解決するため、研究者たちは二通りの説明をこころみている。(1) zeugitai は少数であった。(2) 伝えられている zeugitai の資格要件は信憑性に欠ける、あるいは後代の変更の結果である。

Wees (2001.51-54; 2002.68; 2006.361, 366, 373-374) は (1) の立場をとり、zeugitai は市民の 5~10% を占めるにすぎない裕福なエリートであったと考える。したがって、ソロン時代のアテナイは、zeugitai に pentakosiomedimnoi と hippeis をくわえた 10~20% の上層市民が可耕地の大半を占有し、残りの市民すなわち thetes はほとんど土地を持たない、鋭く二極化した社会であった。そのため、当時の thetes の多くは武具をまかなうことができず、制度上のみならず現実にも、hoplites の兵役から閉め出されていた。Van Wees によれば、その後の経済発展にともなって thetes のなかにも hoplites として従軍できる経済力を持つ者が増え、古典期には hoplites のすくなくとも三分の一を実質的に thetes が占めるまでにいたった。それでも、上位三等級の富裕者が兵役と政治的権利を独占する状態は続き、制度上は、thetes はあいかわらず兵役と公職就任から排除されていた。

ここまでの検討を通してあきらかになったように、thetes が hoplites の兵役を免除されていた、つまり制度上兵役から閉め出されていたことをうらづける十分な証拠はない。したがってわたしたちは、thetes は、実態としてのみならず制度上も、つねに hoplites として従軍していたと考える。Van Wees のいう通り、時代がくだるにしたがって hoplites となりうる thetes が相対的に増加したにせよ、アルカイック期においても、従軍できる経済力を持つ thetes は存在したであろう。『アテナイ人の国制』([*Ath. Pol.*]2.2; 4.5) とプルタルコス (*Sol.*13.3-5) によれば、ソロンの改革前夜のアテナイでは土地の大半を少数の富裕者 (*plousioi*) が独占しており、貧民 (*penētes*) ないし民衆 (*dēmos*) は債務を負い、富裕者の土地を耕作することをよぎなくされていたとされるが、これはかなり誇張されたイメージとみなすべきである。なぜなら、前 630~620 年代に発生したと思われるキュロンのクーデタ未遂事件のさいには、中心市の

外に住む市民が「こぞつて (*pandēmei*)」反乱鎮圧のために駆けつけたと伝えられるからである (Thuc.1.126.7; cf. Hdt.5.71) ⁴⁸。この伝承は、当時、武装可能な自立した市民層がなお広範に存在していたことを示す⁴⁹。したがって、ソロン改革当時も、債務状態に陥った市民は一部にとどまり、その他の市民は依然として自立していたと考えるべきであろう⁵⁰。

一方、(2) の立場をとる研究者たちは、伝承は資格要件にかんする確たる情報にもとづくものではなく、伝えられている数値は信憑性に欠けると考える⁵¹。そうした研究者の一人である de Ste Croix (2004.25-26, 48-51) は、pentakosiomedimnoi 以外の財産等級には、そもそも経済的な資格要件は存在しなかったのであり、むしろ個々の市民が担うことのできる兵役の種類こそが、彼の等級を決めたと主張する。つまり、騎兵か hoplites の兵役を負担できる人々は hippeis か zeugitai の等級に属し、それ以外の人々は thetes になるとされる⁵²。

しかしながら、かりに資格要件の数値を額面どおりにはうけとれないとしても、経済的な資格要件そのものがまったく存在しなかったとは考えにくい。なぜなら、ソロンの財産等級は、政治的特権すなわち公職就任資格と結びついていたからである⁵³。前 480 年以降に年代づけられている二つの奉納碑文

⁴⁸ 年代については、Hornblower 1991.204. *pandēmei* の、特定の部族やデーモスではなく、すべてのデーモスがこぞつてという意味については、Gomme 1959.425; Hornblower 1991.207, 209. Gomme (1959.425) は *ek tōn agrōn* を「田園部から」という意味にとり、このころは中心市の人口は少なく、市民の大半は市外に住んでいたと説明する。一方、Hornblower (1991.207, 209) は、市民たちは当時 Diasia 祭を祝っていた郊外の「Agrai から」中心市へ駆けつけたという Jameson の解釈を支持する。

⁴⁹ van Wees 2002.81. 一部の研究者は、アルカイック期アテナイの軍事活動は総じて小規模・短期、軍制も未熟であって、従軍するのは実質的に少数のエリートにかぎられており、一般市民はほとんど軍事にかかわらなかったと主張するが、キュロン事件のケースを説得的に説明できていない。Frost 1984; Singor 2000; Pritchard 2010. 8-13.

⁵⁰ 村川 1986.163-164; Rhodes 1993.95; 伊藤 1999.77, 79, 82-83, 91, 99, 103 n.18.

⁵¹ Busolt-Swoboda 1920-1926.822 n.1; Gabrielsen 2002a.97-98; id.2002b.212- 213; Rosivach 2002b.41 et n.20; id. 2012. 146 n.9; de Ste.Croix 2004. 31-32. cf. Rhodes 1993. 143.

⁵² 同様な見解をとなえるのは、Spence 1992. 181-182.

⁵³ Foxhall 1997. 132; Rosivach 2012. 146 n.9. cf. Chambers 1990.172; van Wees 2001.54-56.

(Arist.[*Ath.Pol.*]7.4, 26.2; Poll.*Onom.*8.131; *IG* I³ 831 = Raubitschek 1949.No.372 = Hansen 1983.No.269) は、通説的には財産等級の上昇を記念したものと解釈されており、それが正しければ、財産等級と政治的特権の結びつきが、当時なお実質的な意味を失っていなかったことを示す⁵⁴。アルコン職が前 457/6 年に zeugitai に開放されたとの伝承も、それをうらづける⁵⁵。

財産等級が経済的な実質を失ったのは、おそらく、それと結びついた公職の重要性が低下する一方、財産等級との結びつきを持たなかったらしいストラテゴスのような公職が重要性を増してからのことであろう。事実、時代がくぐると、市民の財産等級が実際の経済的地位と乖離していることを示す史料が、少なからず存在する。たとえば、前 4 世紀中ごろのイサイオスの弁論 (7.39) に登場するプロナペスという男は、財産を少なく申告しているくせに、hippeis 相当の公職に就こうとしたという。『アテナイ人の国制』(7.4. cf. 8.1; 47.1) は、pentakosiomedimnoi から抽選されるさだめであったアテナ女神の財務役に、貧しい人が就任することがある、あるいは、thetes は公職に就けなかったので、資格審査のさいに財産等級を問われれば誰も thetes とは答えない、と伝えている⁵⁶。ただし留意すべきなのは、これらの史料は、経済的な資格要件の空洞化を示すと同時に、空洞化が進んだ時代にあってもなお、各財産等級は一定の経済的地位を前提とするという社会通念が残っていたこと、つまり経済的な資格要件が実在したことをも示している点である。前 5 世紀末から前 4 世紀にかけて散見される、財産等級にかかわる幾つかの史料も、その点をうらづけているように思われる⁵⁷。

⁵⁴ Arist. [*Ath.Pol.*]7.4 に引用された奉納碑文の信憑性については、Rhodes 1993.144-145; de Ste. Croix 2004.70-71. *IG* I³ 831 は欠損がいちじるしく、確実な解釈は期しがたい。Keesling (2015) は、どちらの碑文もソロンの財産等級とは無関係と考える。両碑文の通説的な解釈が抱える問題点の指摘には首肯すべき点があるものの、彼女自身の解釈もまた多分に推論にもとづいており、通説を含むそれ以外の解釈に決定的にまざるものとは思えない。

⁵⁵ Hansen 1991.45; van Wees 2001.46.

⁵⁶ Kahrstedt 1934.251-252; Chambers 1990.361; Rhodes 1993.145-148, 551; Spence 1993.181 n.69; Rosivach 2002b.44; Gabrielsen 2002b.214; de Ste. Croix 2004.9-11; van Wees 2006.368.

⁵⁷ Arist.[*Ath.Pol.*]39.6; [Dem.]43.54; Dem.24.144. *IG* I³ 46 への追加修正決議 (前 5 世

したがって、わたしたちは、一方で、各自の兵役負担能力が財産等級を決めたという de Ste.Croix の主張には同意しない。なぜなら、そのような弾力的なシステムのもとでは、各等級はつねに兵役負担能力という確固たる経済的うらづけを持つので、財産等級と実際の経済的地位との乖離がおこるはずはないからである。他方で、わたしたちは、兵役に特定の経済的な資格要件がなかったという点では、彼の主張に同意する。そして、その主張をみとめるとすれば、de Ste Croix が所与としている財産等級と兵役との制度的関係を想定する積極的な理由はないと考える。

たとえば、『アテナイ人の国制』([*Ath.Pol.*]49.2)とクセノフォン(*Eq.mag.*1.9-12)が伝える騎兵の募集手続きは、騎兵の要件が馬を扶養できる経済力と高度な身体能力のみであったことを示している⁵⁸。どちらの史料にも、財産等級への言及はない。応募資格は、自己申告によっていたと思われる。たしかに、騎兵隊を構成した社会層は、hippeis と重複していたにちがいない。トゥキュディデス(3.16.3)は、前428年にアテナイ人が100隻の軍船の乗組員を市民とメトイコイによって充足したさい、hippeis と pentakosiomedimnoi のみが乗船を免除されたと伝えている。当時ペロポネソス軍の侵攻がさし迫っていたことを考えると、この措置の理由は、領土防衛にあたる騎兵隊を留めておくことにあったと思われる⁵⁹。しかし、騎兵隊に hippeis の市民が多かったことは、

紀半ば)は、ブレアへの入植者が thetes と zeugitai から募集されるべきことをさだめており、その意図はともあれ、すくなくとも当時、二つの財産等級が実体のある社会経済的集団と観念されていたことを示す。古典期アテナイのクレルキアの目的と性格については、Jacoby *FGH*.328F119.2112; Kahrstedt 1934.254-255; Pritchard 1998.126; Rosivach 2002b.36-37; Gabrielsen 2002b.220 n.70; de Ste. Croix 2004.11; Moreno 2007.93 et n.78; Guia-Gallego 2010.261-262.

⁵⁸ 騎兵のこのような募集手続きは、はっきりとはわからないが、おそらく前6世紀末ごろに始まったのではないかと考えられている。Bugh 1988.14-20; Spence 1993.9-16.

⁵⁹ Gomme 1959.271; Gabrielsen 2002b.206. この仮説は、前406年、アルギヌサイ海戦前夜の総動員の状況を伝えるクセノフォン(*Hell.*1.6.24)の記事によってうらづけられる。なぜなら、アテナイ人はこのとき、110隻の艦隊に乗員を満たすため、多数の hippeis を含む兵役年齢の市民全員を動員したとされるが、この hippeis は、Thuc.3.16.3 と対比すると、財産等級ではなく騎兵隊の構成員を指していると考えられるからである。Kahrstedt 1934.253; Krentz 1989.152. ただし、Gabrielsen は判断を保留している。

hippeis が軍制上、騎兵隊と関係づけられていたことを意味しない。騎兵隊は特定の社会階層を体現していたわけではなく、ひとつの社会経済的階層と観念されていた hippeis とは別のものであった⁶⁰。

同じことは、hoplites にも該当するのではないだろうか。最富裕者から下層市民まで、さまざまな社会層の人々が hoplites となった。すなわち、富裕者がしばしば hoplites の兵役をはたす一方⁶¹、比較的貧しい人々が hoplites として従軍した例もまた少なくない。わずか 500 ドラクマの財産しか持たないソクラテス (Xen. *Oec.*2.3) は、前 431 年にはデリオンへ、前 424 年にはポティダイアへ、いずれも hoplite として出征した (Pl. *Sym.*221a1-2; Plut. *Alc.*7.3, 6) ⁶²。ハリカルナッソスのディオニュシオスによる引用によって伝わるリュシアスの弁論とその梗概 (Lys.34.4; Dion. Hal. *Arg. ad Lysiam* 34) からは、前 5 世紀末、5,000 人の土地を持たない人々のなかに hoplites や騎兵、弓兵として従軍する者がいたことがうかがわれる⁶³。槍と盾を中心とする hoplites の基本的な装備が馬に比べてはるかに安価であったとすれば、ソクラテスのようにさほど裕福でない人々がそれをまかなうことができたとしても不思議はない⁶⁴。hoplites は、騎兵隊と同じく特定の社会層を体現する集団ではなく、その社会経済的構成は、おそらく騎兵隊以上に多様であったと思われる⁶⁵。したがって、hoplites の兵役には特定の経済的資格要件はなく、ひとつの社会経済的階層と観念されていた zeugitai と制度上の関係はなかったと考えるべきである。

⁶⁰ Bugh 1988.23-25, 32-34; Spence 1993.181-182.

⁶¹ Lys. 6. 46; 14.6, 10, 14-15; 15.5-6; 16.3, 13, 16; Plut. *Alc.* 7.3; Xen. *Hell.* 2.4.24.

⁶² Guia-Gallego (2010.275 n.90) は、ソクラテスを thetes とみなす。Van Wees (2001.60, 71 n.76; 2002.68-69) は、ソクラテスは志願兵として従軍したと考えている。

⁶³ Jameson 1992.144; Isager-Skydsgaard 1992. 79; Spence 1993.181 et n.68; van Wees 2006. 373.

⁶⁴ De Ste Croix (2004.17) は、hoplites として従軍するには、留守中の家族の生活を支えるだけの財産と補助労働力 (奴隷) が必要なため、武具などの初期費用以上の経済力を要したと考える。この問題については、あらためて検討してみたい。

⁶⁵ Gabrielsen 2002b. 214.

おわりに

以上、本稿においてわたしたちは、zeugitaiとして知られるソロンの財産等級が軍制上hoplitesと関係していたという、広く支持された学説の根拠史料を吟味するとともに、関連する先行研究にも再検討をくわえた。その結果は、以下の通りである。

まず、zeugitaiをhoplitesと同一視する唯一の根拠、zeugitaiを「同じ戦列の兵士」とする語源解釈は、それ以外の解釈を否定できるほど決定的なものではなく、したがって、zeugitaiがhoplitesに等しいことをうらづける証拠として十分ではない。つぎに、トゥキュディデスの二つの記事（6.43; 8.24.2）を、徴兵名簿にもとづいて召集されるhoplitesが、zeugitaiをはじめとするthetes以外の上位三等級の市民から成っていた証拠とする解釈は、正しくない。この史料が示しているのは、hoplitesのうち、軍船の搭乗戦闘員とそれ以外の兵士との動員方法の違いのみである。同様に、thetesは徴兵名簿（*katalogos*）に登録されず、したがって上位三等級と異なりhoplitesの兵役を免除されていたという説もまた、十分な根拠を欠いており、支持されない。thetesがhoplitesの兵役から除外されていなかったとすれば、hoplitesを軍制上とくにzeugitaiと関係づける理由はなくなるであろう。最後に、zeugitaiの所有地の規模をvan Weesの試算にしたがって8.7～13ヘクタールと考える場合はもちろん、標準的‘hoplite farm’とされる4～5ヘクタールと仮定しても、アッティカの総可耕地面積にかんがみて、zeugitaiがhoplitesの全員ないし大多数を占めたとは考えにくい。

以上の検討結果にもとづき、わたしたちは、zeugitaiとhoplitesとのあいだには、アルカイック期および古典期を通して、軍制上の関係はなかったと結論する。アテナイ軍の一部門としてのhoplitesを構成したのは、財産等級にかかわらず、20～49歳の兵役年齢にあり、身体壮健でhoplitesとして従軍できる経済力を持つ市民であった⁶⁶。hoplitesは、特定の社会経済的階層を体現して

⁶⁶ Hansen（1981.24-25）は、史料にあらわれるhoplitesは実際に従軍する現役兵を意味するにすぎず、hoplitesを出す社会階層‘hoplite class’という概念は研究者の創造物と考えている。‘hoplite class’の存在を想定するDe Ste Croix（2004.14-15, 23-24）もまた、現役兵としてのhoplitesをそれとは区別してとらえている。

はいなかった。この結論は、アリストテレスの命題—社会経済的な階層と各軍事部門とのあいだには密接な関係があり、各社会層は負担する兵役に比例した政治的特権を享受する—は、アルカイック期・古典期のアテナイ社会にはかならずしも該当しないという仮説を導く。この仮説は、さらなるケース＝スタディによって検証される必要がある。同時に、アリストテレスの命題が、同時代のアテナイにおいて、社会的観念ないしイデオロギーとしては、どのように存在し機能していたのかという問題にも、とりくまねばならない。

参考文献

- Andrewes, A. (1956). *The Greek Tyrants*. Hutchinson.
- id. (1981). The hoplite *katalogos*. *Classical Contributions: Studies in honor of Malcolm Francis McGregor*. G. S. Shrimpton and D. J. McCargar. Locust Valley, New York: 1-3.
- id. (1982). The growth of the Athenian state. *The Cambridge Ancient History* III-3 (2nd). J. Boardman and N. G. L. Hammond. Cambridge: 360-391.
- Bakewell, G. (2007). Written lists of military personnel in Classical Athens. *Politics of Orality*. C. Cooper. Leiden: 89-102.
- Brûlé, P. (1999). La mortalité de guerre en Grèce classique : l'exemple d'Athènes de 490 à 322. *Armées et sociétés de la Grèce classique*. F. Prost. Paris: 51-68.
- Bugh, G. R. (1988). *The Horsemen of Athens*. Princeton NJ.
- Burford-Cooper, A. (1977/8). "The family farm in Greece." *CJ* 73: 162-175.
- Burford, A. (1993). *Land and Labor in the Greek World*. Baltimore-London.
- Busolt, G. and H. Swoboda (1920-1926). *Griechische Staatskunde*. München.
- Chambers, M. H. (1990). *Staat der Athener*. Berlin.
- Chrimes, K. M. T. (1932). "On Solon's property classes." *CR* 46(1): 2-4.
- Christ, M. R. (2001). "Conscription of hoplites in Classical Athens." *CQ* 51(2): 398-422.
- Clerc, M. (1893). *Les métèques athéniens*. Paris.
- Crowley, J. (2012). The Psychology of the Athenian Hoplite: The Culture of Combat in Classical Athens. Cambridge.
- Foxhall, L. (1997). A view from the top: Evaluating the Solonian property classes. *The Development of the Polis in Archaic Greece*. L. G. Mitchell and P. J. Rhodes. London: 113-136.
- Frost, F. J. (1984). "The Athenian military before Cleisthenes." *Historia* 33(3): 283-294.
- Gabrielsen, V. (2002a). The impact of armed forces on governments and politics in

- Archaic and Classical Greek poleis: A response to Hans van Wees. *Army and Power in the Ancient World*. A. Chaniotis and P. Ducrey. Stuttgart: 83-98.
- id. (2002b). Socio-economic classes and ancient Greek warfare. *Ancient History Matters. Studies Presented to Jens Erik Skydsgaard on His Seventieth Birthday*. K. Ascani et al. Rome: 203-220.
- Gomme, A. W. (1956). *A Historical Commentary on Thucydides II*. Oxford.
- id. (1959). *A Historical Commentary on Thucydides I*. Oxford.
- Gomme, A. W., et al. (1970). *A Historical Commentary on Thucydides IV*. Oxford.
- id. (1981). *A Historical Commentary on Thucydides V*. Oxford.
- Guia, M. V. and J. Gallego (2010). "Athenian *zeugitai* and the Solonian census classes: New reflections and perspectives." *Historia* 59(3): 257-281.
- Habicht, C. (1961). "Falsche Urkunden zur Geschichte Athens im Zeitalter der Perserkriege." *Hermes* 89(1): 1-35.
- Hamel, D. (1998). *Athenian Generals, Military Authority in the Classical Period*. Leiden.
- Hansen, M. H. (1981). "The number of Athenian hoplites in 431 BC." *Symbolae Osloenses* 56(1): 19-32.
- id. (1985). *Demography and Democracy: The Number of Athenian Citizens in the Fourth Century B.C. System*. Oxford.
- id. (1991). *Athenian Democracy in the Age of Demosthenes*. Oxford.
- Hansen, P. A., Ed. (1983). *Carmina Epigraphica Graeca saeculorum VIII-V a. Chr. n.* Berlin & New York.
- Hanson, V. D. (1996). *Hoplites into democrats: the changing ideology of Athenian infantry. Demokratia: A Conversation on Democracies, Ancient and Modern*. J. Ober and C. Hedrick. Princeton NJ: 289-312.
- Hignett, C. (1952). *A History of the Athenian Constitution to the end of the fifth century B.C.* Oxford.
- Hodkinson, S. (1988). *Animal husbandry in the Greek polis. Pastoral Economies in Classical Antiquity*. C. R. Whittaker. Cambridge: 35-74.
- Hornblower, S. (1991). *A Commentary on Thucydides I: Books I-III*. Oxford.
- id. (2008). *A Commentary on Thucydides III: Books 5.25-8.109*. Oxford.
- Isager, S. and J. E. Skydsgaard (1992). *Ancient Greek Agriculture*. London & New York.
- 伊藤正 (1999) 「ソロン、土地、収公—ソロンの詩編の分析を中心として—」『ギリシア古代の土地事情』多賀出版: 75-117.
- Jameson, M. H. (1963). "The provisions for mobilization in the decree of Themistokles." *Historia* 12(4): 385-404.
- id. (1992). *Agricultural labor in ancient Greece. Agriculture in Ancient Greece: Proceedings of the Seventh International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 16-17 May 1990*. B. Wells. Stockholm: 135-146.
- id. (2014). *Apollo Lykeios at Athens. Cults and Rites in Ancient Greece*. Cambridge: 41-61 (Originally in *Archaïgnosia* 1.1980: 213-236).
- Jeffery, L. H. (1976). *Archaic Greece: The City-States, c. 700-500 B.C.* London.
- Johansson, M. (2001). "The inscription from Troizen: A decree of Themistocles?" *ZPE*

137: 69-92.

- Jordan, B. (1975). *The Athenian Navy in the Classical Period*. Berkeley & Los Angeles & London.
- Kahrstedt, U. (1934). *Staatsgebiet und Staatsangehörige in Athen*. Stuttgart & Berlin.
- Keesling, C. M. (2015). Solon's property classes on the Athenian acropolis? A reconsideration of *IG I³ 831* and *Ath.Pol.7.4. Cities Called Athens: Studies Honoring John McK.Camp II*. K. F. Daly and L. A. Riccardi. Lewisburg: 115-135.
- Koerte, A. (1932). "Eine Verlustliste aus der Schacht bei den Arginusen?" *Philologische Wochenschrift* 52: 1027-1032.
- Krentz, P. (1989). *Hellenika, I-II.3.10*. Warminster.
- Laing, D. R. J. (1965). A New Interpretation of the Athenian Naval Catalogue *IG II² 1951*. Ann Arbor, Cincinnati.
- MacDowell, D. M. (1978). *The Law in Classical Athens*. London.
- Meritt, B. D. (1953). An Athenian decree. *Studies Presented to David Moore Robinson on his Seventieth Birthday*. G. E. Mylonas and D. Raymond. Missouri: 298-303.
- id. (1967). Some Athenian problems. *Lectures in Memory of Louise Taft Semple: First Series - 1961-1965*. I. C. W. Blegen et al. Cincinnati: 114-132.
- Moreno, A. (2007). *Feeding the Democracy: The Athenian Grain Supply in the Fifth and Fourth Centuries BC*. Oxford.
- Morrison, J. S., et al. (2000). *The Athenian Trireme 2nd*. Cambridge.
- 村川堅太郎 (1986) 「貴族と農民」『村川堅太郎古代史論集 I』岩波書店: 153-171.
- 岡田泰介 (2015) 「前五世紀アテナイの艦隊乗組員 – *IG.I³ 1032* (Athenian Naval Catalogue) の分析を中心に –」『史学雑誌』124 (12): 1-36.
- Osborne, M. J. and S. G. Byrne, Eds. (1994). *A Lexicon of Greek Personal Names II: Attica*. Oxford.
- Pritchard, D.M. (1994). "From hoplite republic to thetic democracy: The social context of the reforms of Ephialtes." *AH* 24: 111-140.
- id. (1998). Thetes, hoplites and the Athenian imaginary. *Ancient History in a Modern University I: The Ancient Near East, Greece and Rome*. T. W. Hillard et al. Sydney and Grand Rapids, Michigan: 121-127.
- id. (2010). The symbiosis between democracy and war: the case of ancient Athens. *War, Democracy and Culture in Classical Athens*. D. Pritchard. Cambridge: 1-62.
- Raaflaub, K. (1999). Archaic and Classical Greece. *War and Society in the Ancient and Medieval Worlds - Asia, the Mediterranean, Europe, and Mesoamerica*. K. A. Raaflaub and N. Rosenstein. Cambridge MA & London: 129-161.
- id. (2006). Athenian and Spartan *eunomia*, or: what to do with Solon's timocracy? *Solon of Athens*. J. H. Blok and A. P. M. H. Lardinois. Leiden: 390-428.
- Raubitschek, A. E. (1949). *Dedications from the Athenian Akropolis*. Cambridge MA.
- Rhodes, P. J. (1993). A Commentary on the Aristotelian Athenian Politeia. Oxford.
- Ridley, R. T. (1979). "The hoplite as citizen: Athenian military institutions in their social context." *Ant. Class.* 48: 508-548.
- Rosivach, V.J. (2002a). "Zeugitai and hoplites." *AHB* 16: 33-43.

- id. (2002b). "The requirements for the Solonic classes in Aristotle, AP 7.4." *Hermes* 130: 36-47.
- id. (2012). "The meaning of zeugites." *CPh.* 107(2): 146-150.
- Sickinger, J. P. (1999). *Public Records and Archives in Classical Athens*. Chapel Hill & London.
- Singor, H. W. (2000). The military side of the Pisistratene Tyranny. *Peisistratos and the Tyranny*. H. Sancisi-Weerdenburg. Amsterdam: 107-129.
- Skydsgaard, J. E. (1988). Solon's *tele* and the agrarian history. A note. *Studies in Ancient History and Numismatics Presented to Rudi Thomsen*. A.Damsgaard-Madsen et al. Aarhus: 50-54.
- Spence, I. G. (1993). The Cavalry of Classical Greece: A Social and Military History with Particular Reference to Athens. Oxford.
- Stanley, P. V. (1999). *The Economic Reforms of Solon*. St. Katharinen.
- Starr, C. G. (1977). The Economic and Social Growth of Early Greece 800-500 B.C. New York.
- Ste. Croix, G. E. M. de (2004). The Solonian census classes and the qualifications for cavalry and hoplite service. *G.E.M. de Ste. Croix, Athenian Democratic Origins and Other Essays*. D. Harvey and R. Parker. Oxford: 1-72.
- Strauss, B. S. (1996). The Athenian trireme, school of democracy. *Demokratia: A Conversation on Democracies, Ancient Modern*. J. Ober and C. Hedrick. Princeton NJ: 313-325.
- id. (2000). Perspectives on the death of fifth-century Athenian seamen. *War and Violence in Ancient Greece*. H. van Wees. London: 261-284.
- Thomson, G. (1953). On Greek land-tenure. *Studies Presented to D. M. Robinson on his Seventieth Birthday* II. G. E. Mylonas and D. Raymond. Saint-Louis: 840-850.
- van Effenterre, H. (1976). "Clisthène et les mesures de mobilisation." *REG* 89: 1-17.
- van Wees, H. (2001). The myth of the middle-class army. *War as a Cultural and Social Force*. T. Bekker-Nielsen and L. Hannestad. Copenhagen: 45-71.
- id. (2002). Tyrants, oligarchs and citizen militias. *Army and Power in the Ancient World*. A. Chaniotis and P. Ducrey. Stuttgart: 61-82.
- id. (2004). Greek Warfare. Myths and Realities. London.
- id. (2006). Mass and elite in Solon's Athens: The property classes revisited. *Solon of Athens*. J. H. Blok and A. P. M. H. Lardinois. Leiden: 351-389.
- Vidal-Naquet, P. (1968). La tradition de l'hoplite athénien. *Problèmes de la guerre en Grèce ancienne*. J.-P. Vernant. Paris: 161-181.
- Whitehead, D. (1986). The Demes of Attica, 508/7 - ca. 250 B.C.: A Political and Social Study. Princeton NJ.